清水勘兵衛

異國のもの

●鳥を

山海經ニ云青羽赤喙能言名曰鸚鵡又禰衡賦ニ書ニ

杜宇

水鶏

巫島

鶏

都島

水上にうるる藤の花みごとわと名付めるとぞ

白き鳥はすとはすとあるを引合

河の鳥八咫まで八すむしろ　このようあれども本紙入て長し

拾遺

[illegible]

紀友則

[illegible]

[illegible]

実教

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅聖喻詩最好音色最好聽似調歌舌更吟嚀高枝拖過低枝西金羽脩眉黑深翎

[illegible]

内裏のうらふすまぬぎ[illegible]

清少

[illegible]

閑元遺事明皇於禁苑中見黄鳥呼金衣公子

王汝玉出左掖図鶯落絮飛花滿林城万年枝上一鶯鳴宮鶯囀曉光題

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

今上

[illegible]

内裏より[illegible]

[illegible]

(さるはとは)
さるハ竹もいとちかくうつりぬべき枝ながらもあやし

禁秘抄云中殿(清涼殿也)東庭竹臺二云々

(禁中を退出)
まかでゝきけバあやしの梅の中がきりをはるやうまでなきさわぐなや

ゆるへあさ雨も(初音)まちかねてらおちら雨ち出られ店やどへてとみどき

めでらるれみる月など夜ハ雨よる音もせねど定目なくて鶯作しも

(鶯のなくさすの夏ハなまめかしくよるへしとぞ)
なげくそ作りよし春(春の)のとかとさらく店ちなまくらてものなれど秋

(夏秋の末まで老くるとぞ)
(人らしからぬ人ハ人もしらぬとぞいひて鶯のなくさまなるたとへや)
おもひだる店ならぬしく筆なきくをば志店人やある

あくまのとちく店はとまありてものハくれのいふ(末の詮)

(是もむさとなくことぞ)(鵄)(鳶)
鳥の中ようくとびのこゑハ見えまくへやなある。鶯笛などよはなり

(笛ハ鶯よになぬとぞ)(鶏)(雛)(鳴)(すべてのこと)
それどころゆかぬこゝちする　にはとりのひなさき　ふとり

山鳥ハ友をこひてなくに、かゞみを見せつればなぐさむらんとわかあ(わかしきこゝろ)
はれや。谷へだてゝ程など、いと心ぐるし。

山鳥のおろかなるすがたのかゞみにうつりけるをまことになるそのけめ
はかゞみの事縁起の上にハ見えざるなるべし。むかしとある所
ほどに山鳥を奉りて国々の能を尽くしけるに。
帝これを好てひさしくなかざりけるなれ。おもふのなき
この山鳥なかせんと人々を召して、えんと待けるまゝバさ雨くに
なかせんとしてひゞくなりその女。友をえらびてなかせ給ふと
おもひて嬉しうなる鏡を鏡のうらに知りながらなぐさむ
すなはちなくる事を知りて尾をひろげてかゞみのおもてに

あてゝあるなり。それよりおこのあれ居る居るまゝ。みいりて。
山ちよりハめぐりと必峯を隱(多)てあるゆへ。ちかよりがたく。雉(ヲヲ)尾
をまきげてぽつくりてゝ。ぬぐりのねゝ高ゆへ。
くみもいふゆへ又山ちの尾のとゞまりおのとらあるゆへ。山ち
の雉(ヲヲ)をぐら尾といふ。ぢさやと。古人ハ名ゝとゝや。峯を隱
よるハ雄雉(ヲヲ)すなわち。ぢかぐ。ぢちをぬる心なもゆへてよめる。
又ぢかぐ。ぢちをぬるけめハ。よるゆへいふ。ぢちをぬるゆへ。よるとも
よるとも。ぢちをぬるけめハ唱の字ゆへ
つるをこゝぢ。ぢちをぬるけめハ。大キナル心也
めでゝあり。

李浮仁伯(カ)相鶴經(ニ) 躰尚製(レ)故其色白(シ)色閑(ナリ)天故頭赤食(レ)於水
故啄(ニ)長翔(ル)於雲(ニ)故毛豊而肉疎(シ)大喉以吐(テ)故修頸以納(ル)新故
大壽不可量(ル) 下畧 鳴(クハ)則聞(ツ)天飛(ハ)則一挙(キヨ)千里鶴百六十
年雄(テ)雌相視(アハス)孕(ム)一千六百年也

入内雀のる
りらあるさすめ

りらあるさを上の久へつけて雀と句をさゝあて高字ゆ
いろはぐのる

雀禹(サイウ)賜食(ニク)注云鵲 伊加留(カ)貌似(ニハトニ)鴿而白啄(ツキ)者也
無名死(ノ)註(ニ)斑鳩(イカルカ) 和名同(レ) 日本紀
一説あるわしまさあるへ人の云ゆめまとゆふるまて地ゆ

啄木鳥 尓雅ニ斵木一名鶩 和名天良豆、木食樹中虫也
啄木 詩ニ無從尓啄摧我棟梁 又王九之ノ七言の句ニ
皆長數寸刼如鐵丁〻亂鑿乾枯査 ちご〻番通の
ちょうけらつつき。ちょうけらつつき。但源氏ノ和名
抄ハ啄木を本草ニ拠ルなり。本草ニ拠ルなり
と例して一名鷦鷯とあり。自関東謂之ハ雀又謂女通ともよ
ハとよぶ宮をけらつつきとよぶ。このるゝ性ちご〻

啄木ハこのゝを拠るゆゑ也。また又ちょうあみ名ハ啄木
のゝとあり。ちょうけらつつき。陳巳斉。王元之。ちゝの説。和漢
引合て啄木を拠ると定べきゝや 本草も和名抄
まで考みれども。啄木ハ婦人一物のゝともみえ。国語も
啄木ハ婦人と云て入。多識扁同一 通言を捨て考ル
ゝ也

眉目 眼睛居の字眼ハ目のゝ
清ハ目をみめわろし 面のゝ面ハ目のゝ
ぜ。ゆるぎ 万木森 近江高嶋郡 ゆるぎ ゆるぎ ゆるぎ ゆるぎ
大木
宮ハやゆる木のゝ名ハ宮ハ宮ハ宮ハ宮ハ宮ハ宮ハ宮ハ宮ハ
隨ハ葉月わろきゝ也 隨ハ葉月わろきゝ也 隨ハ葉月わろきゝ也

属玉といひて志きみあぞるへ霊鳥と名付。の為に高橋を営
の清きふかきていふ。かゝる所にてみあわうしと云ふにや。
又眼げのるゝ。わきさて去らいひかんるにおはしつかしよしハ
寰化論に鷺以目盼而受胎といふ。なるにやおもひやらん
をしいとなやかてみにありてでゝのよるの霜をもかへんなどいはれし
本草　鴛鴦終日並遊有宛在水中央之意也
古今註　雌雄未相離人得其一則一相思而死
くるみのやうハもの霜をはらひむさまかなきにれ事まことにか

ちどり

八雲抄に完家もちどりなくとそかけるまでもきこえけるや

雄鳴て星がけ時。蓼花の出に蜘蛛の巣の人と云ふ人の。婦ある鳥
をひて出井をとりて。鷺を足をかへてなやさしくとちらびとかう花
ふかくら取。なこどわとぶちへはけやことゆふ也

名寄
二むら濃山のもしるぬきそめに明ぬと告る鳥そのこゑ

●あてなるもの　貴勝妙の三字なるあてとよむやすがれしや

うすむらさきしろかさねにかざみ

薄色　装束の色に　經紫緯白　又説經白緯青

白重　更衣の時ゟしろきかさね也。尾衣のおもし。是ハ袍の表白
を重ぬるをいふ也。　白襲表裏白平絹更衣時上下着之
かざみを衣上にきるうすきもの也

あばらのあまつるいれて。あつ[illegible]きるのあるよいはる

けばのし 紙巳の伝 手れおのを削るや

江注云 新任大臣大饗ニ云 羞膳物暑月削氷甘瓜等云、

同五列見首書ニ云 粉熟又加削氷列見延引及暑月如之

あまつら 千歳蔓汁 本草ニ味甘平無毒續筋骨長肌肉

一名 蘿蔔 蘇敬註ニ即今之蘆菔藤汁是也 和名 阿末豆良

本朝式ニ云 甘蔓也 あまつら味甘あるものや

[illegible] 和名 金椀 日本霊異記ニ云 甚器皆椀俗云

おかもち利 古語ニ謂椀ヲ麿利宜用為金椀也

すれてあてあるうち

稲のけらふ雲乃ふるる。いみじうう[illegible]きらぐのいらぐ[illegible]

鞠のこ

水精念珠

[illegible]のこ すいしやのずず

●むしそ

金鐘虫

すずむし

松むし

蜂蜂虫ともいふ

ぬけむし

促織 絡線娘 蟋蟀

はたおり

きりぎりす

蟋蟀

ふるむし是也

ゆまつつ

螢

ほたる

みのむしいをあらはや。鬼のうみくだけおやよ泣てぶりもおそ

ろしきこうぐつるむしとて。おやのあやしきさぬ引ちぎくぶい西秋

風ぬんおりるぞ。ぶんずるぞでよいもてよげていよるもおらぶ風

のすぐ風ふて。蓮月ばりふるわぐ。ぶらくとけるふげるぐぶぐ

うわつるや

八雲抄云 鬼のすみのむしとある　まことにまこと

ほんのこみのむし　鬼とんぼうなどみしらこ蓋じて蛭や

蜩 せみの大さふるまし　ぬづくし　まことあらばや

傳咸叩頭虫賦云　虫之細微者触之叩頭　叩頭虫　奴加豆木

さまざまの虫のなかにて　さほこうろよ　ぬづくし

ていはどめきあるこ　ほこそおくれ　蝿

いまはべれ　あいぶやうあくぶきめきあるこ　人くしうかきいづべ

まのやうふのうねどらうげのもよ　居

めこほのぐらん　人のなるつこ　ほいうあるべかこ

楊子方言云陳楚之間謂之蝿和名波閉　すべてこの文まこ

の欧阿公の憎蒼蝿賦の心や　蝿ちのくさまハ蒼蝿こ吾

嗟爾之為生なり　万の物よりおるこ　遂乳尋香無處不到

くうのぐよあるこほあるこそハ　尋頭撲面とあるこ　郷や和漢

の業ほあやしこさまでこ　ほこうれ　ほこ

あつむ　いとあるこ　楊の上とびあるくいとあ

夜虫こ　ほ　ほ　ほ　火とあむし　蛍蝦　ぴいづまこ　ほのや

ちうべこさや　ほこのあつむ　ほ　ほ　ほ　蛍

とこつこ　ほ　ほとへバ楊のとびあるくほつ　ほ　蝦

とあ虫ハ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ　ほ

ばれ。家のあるじ、八月蛾の事とも言ひし
あるをまくらなどいひ。みじう水ちとあるとも。あゆあり
とぞいひおこなれ

この蜻水黽と言ひて。ぜよいふちうとも言ふ。
水上をあゆむものし。本草水黽のりよ 水黽羣遊水上
水凋飛長寸許四脚非海馬之水馬也。又蟣のりよ大なる
蟣なる蜻といふと言ふ。水黽とる蟣一名ちりぬ
水黽と蜻と計言ふや

七月計よ風のいとう強ゆる。雨あるのさがーさ日。おちるをすぐしたば。
扇もおちるなり。汗の香のすとりて抱るる。さぬのうすさをとりてぞ

ねしとぞおこなれ

●よぎかきもの 書ぬ物ぐうの名也

うみあるーさんのちりさあやめ 猿

ぼうるる 蓼

ちりぐみのるも

ぼうるる あるさ紙ぼうるさ言ふ

もつてよ赫蹏 カクテイ といふ。これあるさ紙の名也。孟康
云蹏猶地也。染素紙令赤書之。是赤さ紙のもの
紙いひうるる。染よか納言の言ひぐくる。延年ぞて赤さ
紙よ筆とそむ。すみ文字ちやうのふくさ事也。余ぐ
ぼうるる編集せ。心正年法論よ言ひぐくすみ。とうすく
ぢむぐらよ言ひるる。これあるさ紙の言ひ秘蔵のるも

（是こげすの家がらや）
（ゆうさまの家や）
おすの家は言の山ろう。又月の出人ぞいとうとおし
（黄牛やうしぬすと子や車ぬすびと）
月のいとあるさまに。車蓋の二字ゐるさうるゐあめうじげうる　おいうる
（はるゝ所也）　教
ぬれはるゝとうてあげさ　行
（あるこの三ぢい者のあるこの）
えぐ所しさかもとくいのとうとふ　疾妬
（三のひい者の方ぐじ）
おいとれ　ねみ所
寢惑
おるゝとうねまぐいうるぞまるさやうよひげうるおのとうとある
椎
酸
（乾）
ゆみさ所　蓮　ちとあるさぬうとあ楊うひてすぐうる所　おすのうるある
（さやうのぐひ多ーとや）
夜
うはゐるさる所このぐうをそれのこそあれ　ゆおいのすけのや
行
ううるぐぬすぐうていやしおや
左馬余情云左衛門曰親員一親員を先と入所とふ
ものや左衛門ふら兼ものを夢丁所つるさ所とうてゆげを
（カドノ）
いふやこのゆぐさ肴背長の員ものや。がの長ハ赤さ狩衣
（フ）
白帥の袴ぞ。白杖雜人追掛ものや
（テ）
車駕出行先按行及道邊隱映處檢察非常前後叱呵觀人不
（スル）言登高者使下若在所幸皆先防禁門巷是外諸門警固
之役也
人よあぐうる所うのうのきぬぱさ狩ぐうくしもうちさ西うふ。人ひ一番
（倩）（嫌疑）（うぐはーきもの倩あーむ心）（戴）
ぐあるぐうう。西ぐうさものやあるとあるふわるもとぐむ
（恐）
弓兼弦弟して。洲門弦ちふ。帆掌をい所むふ所つるさるぐ。
人よ恐うる所や。洲作を相当従五位弟ぐその袍赤弟
（ハ）
て。目出ぐうくうるあわぐ。ぬぐうくしるとふや。源氏水尾

げんの差さう法を始めて作まて人うちあつふまの所
あるさあしさまて。おごろくしき赤ぎぬ姿。てさらげやと
あるもこのゆげの作なるや
六位義人うこの判官とうちいひて。義人判官のあくまてうくしきあうし
おのづ。里人あすあるどそこの世人とぐふおもひくらず。貝をぐふあ
ぬでわるもと人の。内わるろ乃日とものるどこものびて入ゆ高と
そ。いとうさあるれ。

六位義人とハ。親屋の厨なるの六位義人祖義さ所やよの判官
とそ。検非違使乃厨の。昇殿をまわるる
上のとハ屋上せるや。検非違使乃厨の昇殿をまわるる

事なれど。是を義人なりけ。昇殿をうら語や。親家中ノ判官陸奥
グリー
文城使の判官など侍ればそなるるあるぶ検非違使のる
治定すべし

風流なる赤のさ面
赤ぐあるさものしる所ルて。うちうち高さ所ける面のおもさげよいやし
えびいくしうくしうむとをけるる
あるひきうくしさける面さそ。義人の法つるどあるづうい
くてあるさものしる所ル帳よハふげるうんよまておもさげふ

くさげも
いやしさ所の心や。
袍　裏服の袍の多　みしくみどてあるさ面　綾　ルても
ぬうらう。うのさぬわるさあけ。ねずみのおのやうてわぐよ和てうし
衣行　義人上の判官やしさ面あれ。内わるれ。あるひあるさハ語恐せよりとの也
なるど。ゆげあるさやかるれ人くなる。このつるさのるどそねんどてどあ

在庁官人のこと。在庁の庁の
ちりし。在庁の官人を。　廊 わたどのりんとあまたゐて。あまくだるのせ（定額過怠人）
ゆやすくぞ。ちびよせてまのかどへつよ。きらげなるおのこ、少々人わたく
かどのちかさはみふくわり。さぬどもはさみてたしぬさきのまへし
なじうらみくるかくるま入る。ら矢をてかこちのかどまて（太刀）
あのくとゞ。るがぞとゞまり。はいわく。すかりどのゝとびはらし
ならしさげみ。やけがおてあらぬとも。いきても、いわぐ。いぬるの
おのぞうぞふくし。　月夜ふむかしなるあはれさは（空車）
さらげなるおとりふくげなるめかされ　むげくろくふくおるなり
人のやしおつされど。このかたすなる人のちごまてあそびさは
とのまばりさまてあるゆえおりしさものぞあれ

禁秘抄ニ主殿司六人ニ。職原抄ニ云近代十二人。華族幽玄デ
送ルヲ日　按ズルニ華族幽玄者華族末流幽微之人ノ女ヲ任ズレ之
おもせのさかくさげうらやるしきまのいなし。ちさく人よせるはも
あがしきわざやわくてくらちくなるおほはるよくてあん（容之みかた）
をあしてちくくむし。あまし。おいてこものゝゆかりども。おもむき
さあしなるをいとはげきくしうめやすし。このまばゆきろく
あいさやうげさくむともまてかゝずふにあるやぞく
さぬなどいはあしうて。あはれなるやとしておがゆき
袖口大ニ広ク。衣袖口小ニ限ル。出入ノ日小袖ト唐衣ハ者大卓ヲ
やせ。孺不甚ダ褶ヲ総テ一切女房不ル分ケ高下ヲ不レ労ヲ蹈ム皮足袋ヲ也

包刀自衣上ニ着ル唐衣ヲ女孺者不着衣中袖上ニ着ル唐衣ヲ
唐衣者袖ハ身長皆短者ヤ女孺ハ弘使者ヤ加着ル唐衣ヲ
女孺ハ御所中掃除拭油ハ役也
男の具子居随身ごとくそのきまりあるも
おとこまま随身にてあるべし
も。随身ハ家ごとにいやしくしく
随身前駆ハ番。随身ハ家ごとに様あり中府の随身ハ小随身
小随身ハ家ごとに名ばかりなれども中府随身ハ免
ゐてハつかまつるべし中務ハ諸衛の督佐ごとして。
花蔭ハ殿上の出免ぬを所て。公達も陪ずるを
をわるべしや。

蔵などおのおのきらきはやかおのおのひかれども
職原 辨官人官中事大辨取執行也仍為重職名家譜代
輩殊依清撰任之花族之中有才名之輩参議之時兼之
為規摸無文才不居之也 名家者廣橋舊九柳原甘露寺万里小路
中御門也
左右大弁 二人 左右中弁 二人 左右少弁 二人 又中少弁ニ同
拾官 又必任之仍謂之七弁
ちうさうのめ。ちうみ。ごくて。随身ちうそ。をわるさや。
裾 下襲の裾やもしくは。ちうを長する時。はかまを
よりて。ちうはかりて長ク仍一ゆりて下ゲさせるなり
ゆゑ。長さハ代々の分不同也但代々摂家ハ用不所

名を弘云るの八尺や。大臣八一丈。関白は八一丈二尺や。
大臣くれば。たゞ[立][部]ようべし。下臣の名臣くは[立]
ちきれとうしのあてゝみのりて
職御曹子 中宮定子の兄弟伊周や。いまの思ひどのはよ。
西ーさ子西や。
[あの京房と]
彩の弁乃ぶとものをぶを久しくもいひあらのつれど
左中将従五位下。義孝の子息。正三位大宰帥[ノ]大納言
行成卿。従一条院万寿三年二月[ノ]薨[ス]五十六。能書、三蹟内
号[ス]権蹟[ト]
職事補任 散位従四位下藤行成長徳元年八月廿九日[ニ]補[ス]

[ニ]蔵人頭左衛門権佐同二年正月廿五日民部大輔。四月廿四日
[清少]
[ノ]左中辨
[清少詞]
[ノ]成卿の名也
[ノ]成を
[ノ]成の名也
[清少]
[ノ]成清少との中
[定子]

[ノ]成の名也
[清少]
[ノ]成を
[ノ]成の
[清少]
[ノ]成清少との中
[定子]

なべてありやうなるを人さのみしりたるに、なほおくふかき
こころざまを見しりたれば、をしなべたらずなど、御前にもけいし
またさしろしめしたるを、つねに女はおのれをよろこぶもの
のためにかほづくりす、士はおのれをしる人のためにしぬとなんいひたると
といひあはせ給ひつゝよくしり給ふ

戦国策曰、晋ノ豫譲云、士ハ為知己者死、女ハ為悦己者容

この語の心を先儒の解に是其真情也

實に此心ハ清少納言に懇志をいはんとての詞や

と練こあふさのもてなやうなき此ぞいひかけてあるふ

この奥に左衛門の尉則光と云人を清少のかたらひしる語

わらひて中らすれど人くるものいりなくかゝらぬとかたらで、なか
ありけるなみて、なにもせざりしとのたまふを、いみじうをかしげなれ
さわらむ人をみゆるもはしとのたまひしにおいて、みて、ゆきぬと
のたまへるもなかへともなかなほげれバなかみてとてなのからみつ
べきなかりもりかともあらざなりして西をとるに見ゆるはぬを西ごろ
なりそなれとしるなか西ハざわりかりとなりしやらひけどもおこるぞ
おもしのなかくまりやいづらむ

冬の直衣とハ四季の装束ある故に冬の装束にあらず

かさねて更衣のころやゝあけくしてなふくしも
人のさぬかちにて

装束は華美。元服の後大臣までも。袍の紋丁子の丸。杏葉
なすもきや。指図に盛ても。雲立涌の紋。大臣の時。雲より
鶴や地ハいづれもむかしの綾。前途の後。宿老ハむかしなき
のしめは綾を着する事や。夜ハ穀。文ハ冬に同。冬ハいづれも
かねてをも濃紫や。但五位中将ハ紫のなし。但しわかきハくろく
てもよからん。近代服定の女ひあれて。下を蘊帯にてとめ。
上をかの夜式ハ冬をせんじて染事。冬もうつくしく
もなきや。かしの木なれど。さくらの皮にても染事なり。
冬ハ手絹のうすあり。文ハおまてにおはし。指録の時。家は文
浮線綾下襲は文の由。未満四月の記にあり。

殿上人どもはとのゐすがたをあらはして日たかういづるとて武戸（宿直姿ハ直衣姿のよりとありと）（晨に）
（中宮の方の女房）のおもてのはしのわたり何にか。ちくのやり戸をあけさせのまうでて（清少の）（中宮の）（一条の院）
た前。宮はおまへにむさせ給へれど。あさもわすまずかとぞみしを（中宮定子也）（雲と清少を）
（中宮の）わらはせ給ふなりくさぬを髪のうつりうちとさて。とのゐものもおかしも。（さげ髪のうえ）（宿直の衣き）（よるの物）
（御いてしま成る恐し）うつくしかりけるあらうへ入りおはしまして。陣ちかい入のなど仕給ぼ。（中宮の）
殿上人のゆゆしでわさてものなどいふなどもあるを。うくさ（天子中宮のかたを）（女房つぎ）
（中宮の居る様子）あみせそとわらはせ給ぬ。はてあせのおかしくおもしろいざと絹ら（天子中宮の）（又清少を）（中宮の）
かれどいはのかなどつくろひてそとて来らぼ。いらせなさいて。在（清閑）（又清の）（中宮の女）
（中宮のおちれ）めでたきさるなどをいれあはせておる事に。あのやり戸乃そなり（式部と清少と）
木丁のまはにしわる事になりてすまうとすずあのあきる事に。くるを

くろきものゝ見ゆれば、のりたかゞゐたるなめりとて見もいれで、
猶ことゞもをいふに、いとよくゑみたる顔のさし出たるも、なほのりたか
なめりとて見やりたれば、あらぬかほなり。あさましとわらひさはぎて、
几帳引なほしかくるれど、頭の弁にぞおはしける。見えじ
としつるものをと、いとくちをし。もろともにゐたる人は、こなたに
むきたれば、かほもみえず。たちいでゝ、いみじくなごりなくも
見つるかなとのたまへば、のりたかとおもひ侍りつれば、あなづりてぞかし。
などかは見じとのたまふに、さつくづくとはといふに、女はねおき顔なむ
いとかたきといへば、ある人のつぼねにいきて、かいまみして、
またもみやするとてきたりつるなり。まだうへのおはしましつるをりから

あるをばしらざりけるとて、それよりのちぞつぼねのすだれうちかづき
などしたまふめりき

殿上の名たいめんこそ猶おかしけれ

名謁　是より名対面のことをいふ

名対面とは殿上にとのゐせる侍臣の名をとひ給ふを名のるなり　北山抄云　六府次将以下一員近衛供奉　装束同行幸
其外宮司無中少将者帯弓箭供奉　入御之後王卿名対面
宮司向受之　諸衛不脱弓箭著饗座

御前に人さぶらふをりは、やがてとふもおかし。あしおともしてくづれ
いづるを、うへの御つぼねのひんがしおもてにて、みゝをとなへてきくに、
しる人の名のあるは、ふとれいのむねつぶるらんかし。またありともよく

きゝぬ人なやゝこのわらは国はゝ名号面二耳とすゝめてきこゆ　人をゆゝ安堵
ゆゝしきふみとゝゝかやゝまぎれ国はゝ名号面の刻限　詩利や　ゆみのつる紙のうすや
ぐらのうちゝ

源ダイの巻ゝ　ゆうゝはものを流ゝ　弓紙

うちゝゝしてとゝゝ　ゆうゝの海ゝ　文の一刻ゝ侍ゝの名号面ゝ名

九年ゝゝ　国ゝ　文の一刻ゝ名ゝ　第一巻ゝ　南殿の

くはの巻をめきいづるゝ　龍人のいとゝ　五龍　ゆみぐらめしてゝ

みの宮　綱ゝ　のびあがりひざまづく　躾ゝ　主上ゝ　ゝ

うゝ　龍人の間ゝ　諸ゝ　多の字声

ゝ　障ゝ　名号面ゝ

まゝ　ゝ　ゝ　ゝ

源氏家譜　近衛右大臣能有五代孫従五位下伊賀守方基子

方弘　文藏前阿波守致明為子　弘明八ゝの父也

名号面ゝ　方弘殿ゝ　叱　考ゝ　方弘ゝ

公達のゝ　ゝ　ゝ　ゝ

副の字ゝ　ゝ　ゝ

調朝夕御膳所　御厨子所　拾芥云ゝ厨子所四位殿上人の別

當民部大輔五位為預也　在坂原殿西廂ゝ内膳内蔵造酒

大膳及諸ゝ厨子府ゝ　殿ゝ　弟ゝ　ゝ

市正泉ゝ　宮ゝ　熟食進月奏

方弘皆ゝ　罵　方弘ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

らずや。とのもりづかさ人々などのいひけるを。やゝまさひろがきたなき
ものぞや。とていとゞさはがれけり　わかくよろしきおのこの
げすをんなのなよびなれていひたるこそにくけれ
しりながらも、なにとかやかたもじハおぼえでいふハおかし。宮づかへ
所のつぼねによりて、よるなどあしかるべけれど、とのもりづかさ
さらぬたゞ所などハ、さぶらひなどにあるものをゐてきても
よばせよかし。てづからハこゑもしるきに。はしたもの、わらはなどハ、されどよし。わかき人
とちごどもなどハこえたるよし。ずりやう（受領の国の守）などおとなだちぬるも
いとしおやなどやせ（瘦）ほそりたるこそ、こゝろもとなけれ。
よろづのことよりも、わびしげなるくるまに、なり（形）あしくて、ものみる人こそ

どもハあれど、さうぞくよきこそいみじけれ。牛かひハ、いとまさりて
きよげなるハいとわろし　車のしりにおとなしき
どものつきたるこそおかしけれ。おのこずゐじん
のみえぬべきさまなる、すだれのすそ（美濃）ごかしなどぞ、みすのうち
まだみえぬ。ばかる車のうしろよりのぞきてうちそひたるこそ
わびしげなるものハ、みそかなるあかきなりあしくて人つかひわろき。やれ
など、くらしなれど、あまたみてはゝかりをさき
くさなりや。げにしひ人あまたハありて、わらはべのさまなりげなる、ある
まじくみゆれ。家にゐたる人も、さるまらうど（賓客）に、つかひ（使者）まで
まうでのいできたるも、おかしきわろきハのありさまみゆるハいと

清少

おし。人の家の門の前をわたるに。さふらひめきたるものゝすゑして。
鄙（いやしき男）
ひめさゝなおのこわらはのまなこして。おのこの十ばかりなるが
辻又土也
みおりぐるはひさげてもあるさでなるも。またいつゝむつ
延　あげまき出る也
ばかりなるがみへくびのもとにみなくゝりいとあかうふくら
膨
かなるが。あやしきゆみしもとやうなるものなどさゝげたる。いとうつく
ずいくの事
しくくるまとゞめて。いだきいれまほしくこそあれ。
車の内へ入ことの清少の心也

笏（シモト）　唐令ニ云　笏大頭二分小頭一分半。是後の世のしもと
起りて科人をうつものや。棘あるを山椒にてすなる杖也

薫
あさらかにてわたりゆきたるに香のかみしもりて侍るはいとをかしきまで。
檳榔毛之車一名二毛也
よきさ家の中門あけてびらうげの車のしろくきよげなるに　あをうきさや

蘇芳之下簾
すはうの下すだれ。にほひいときよらにて。しぢにうちかけたるこそ
ゑよくさかや
めでたけれ

榻　唐韻ニ云　和名之知　床也　字彙ニ云　榻狀狹而長者也

車をすへてをくものや。くるまのしぢのやうなるをかくしをかず
して。ゐるときさ車のかうらんをおさへてをくものや
車供奉の人也
五位六位などの下がさねのしりはさみて。そのいとしろきにあふぎうちをきなど
下襲
裾を帯にはさみたる也
扇などつけてもつ事
すがたなどして。ゆきちがひ。またさうぞくし。つぼやなぐひおひたる
左右
随身の。出入しなれいとつきづきし
規摸の随身を供二つれて出入するなり

西宮記ニ諸衛ノ将佐有ル御出之時負フ壺胡簶ヲ也

毛氏傳ニ云　棚ハ所以覆フ矢ヲ也　玉篇ニ　箙ハ胡簶之室也

厨子(ずし)なり。のいとまきらげ。ほうげ。ほうげ。出(で)て。おがみ。どの。くんや。さうふ。
おがみ。いとまきほうおう。

●あまさを

山城(やましろ)小野山(おのやま)上(かみ)の法師(ほうし)
青(あを)ひ。ひ。あまさ　布留和州(ふるわしう)
山(やま)の。さ。さを法皇(ほうわう)の法師(ほうし)。ごと和(わ)はまの
班智紀州(はちきしう)
くんこそめでこそ。ひ。ひ。ものこそ。ハ。班(はん)ゐ。ものよ。ものこそ。ものこそ。
猿拾遺(さるしうい)　坂建滅院(はけんめいいん)
いとまきまさ。ものこそ。ものよ。ものこそ。ものこそ。ものこそ。
ものこそ寛平法皇(くわんへいほうわう)の山(やま)の。あまさ。ものこそ。法華(ほけ)。ものこそ。行(ぎう)。ものこそ。
あ。紙(かみ)。ものこそ。ものこそ。法師(ほうし)。ものこそ。
五十九代
宇多天皇(うだてんわう)。光孝天皇(くわうこてんわう)。第(だい)三(さん)の子(こ)。母(はは)。皇后班子(ハンシ)。仲野親王(なかのしんわう)の。むすめ。寛平九年(くわんへいくねん)七月(しちがつ)三日(みか)。天皇(てんわう)。位(くらい)。大子敦仁(アツヒト)
猛(たけ)ばりて。朱雀院(すざくいん)。同居(どうきょ)。時(とき)。法年(ほうねん)三十(さんじう)。亭子院(ていしいん)と。
申(もう)。法(ほう)。は。髮(かみ)。そ。そ。し。め。寛平法皇(くわんへいほうわう)と。ハ。在位十(ざいくらいじう)
や。ど。又(また)の。名(なを)。花山院(くわさんいん)。三山頂礼(さんちやうらい)。諸国(しこく)。巡行(じんぎう)。し。の。時(とき)。法
師(ほうし)。ず。ら。ら。や
花山院(くわさんいん)。法泉寺(ほうせんじ)。一(いち)。ら。子(こ)。母(はは)。皇后(くわうこう)。懐子(ふところこ)。摂政(せつしやう)。藤原(ふじわら)
太良伊尹(たらいこれまさ)。女(むすめ)。寛和(くわんわ)二(に)年(ねん)六月(ろくがつ)廿二日(にじうにち)。おりわ。さ。や。ま。も
山寺(やまでら)。ぬ。ば。ら。おりし。ぬ。ら。こ。深山(みやま)。入(いり)。仏(ぶつ)。道(だう)。行(ぎう)。ひ。ら。し
ー。や。南院(なんいん)。ぬ。ば。ら。ぬ。ら。の。滝(たき)。や。花山院(くわさんいん)。の。ら。ら。ど
の。ま。ら。元亨釋書(げんこうしやくしよ)。明(めい)。ら。ら。ば。ば。法皇(ほうわう)。の。法師(ほうし)。し。は。は。
ま。ら。ん。こ。そ。め。で。こ。ら。れ。ら。ら。の。こ。こ。ば。ば。法師(ほうし)。は。ら。と。ら。ら。ら。

なるやと思へばしらでみなべきほど稚智者の評をまつや

奥州裏滝
とゞろきのたきをいかにしかもあそびしけん（とゞろくとも云名もあるとて）

●はし　を

越前 又云[illegible]
あさむつのはし

余十年ばかりさきに越前の雲矢種といふ俳諧のすきものありて
あそびに行たりしある日の席にてこのはしの名
[illegible]今はあさうづのはしといふ文字にはあさ生津と
[illegible]佐(サ)波(バ)羅(ラ)の律(リチ)[illegible]清水と
[illegible]あさむつといへりあさむつのはしはあさうづのはし
のなりや

摂州長柄
ながらのはし

上野佐野
さのゝ舟はし

[illegible]
いかにはし

くさぎのはし

肥後天草
あまのはし

大和五条
うたゝねのはし

江州瀬田
せたのはし

行合
ゆきあひのはし

近江濱名
はまなのはし

作州真橋
とがのはし

信濃岐蘇路
きそのかけはし

摂州 又[illegible]
[illegible]のはし

奥州緒絶 又小河
をだえのはし

摂州堀江
ほりえのはし

鵲のはし 八雲抄に津の国[illegible]未木[illegible]周防[illegible]詩[illegible]
淮南子に烏鵲塡(ウヅミ)河(ヲ)成(ナシ)橋(ヲ)度(ス)織女(ヲ)とあるなるや家持の
[illegible]かさゝぎのはしは天のはしや百人一首まで[illegible]
や 行あひのはしを[illegible]非(ス)[illegible]

八雲未勘
[illegible]のはし
家恵(エ)が[illegible]の国[illegible]

下野山菅
山すげのはし
[illegible]

せきのわざ名を聞におもしきや。

うねめのもり 大和猿沢也

あれもし。まわれ玉桐のやうなるものふるはす。まさき

欄干に?はしらる。宋このはかるすはしるて

高見大納言資慶卿よりうけたまはりしおくらるさ

しる橋やばしもおもさみどりさはのるやと

ゆきさせぬ。

●里を

あさきの里

八雲の[illegible]に。清お納言をうつしてまゐらる。玄?法家の湯

本の[illegible]。家城氏孝房といふ人の子孫せられける[illegible]

[illegible]の里とあらためて奥あの玉付あり

長雨未勤　あやめの里
和州一本松尾の里　あまみの里
摂州長居　おりおれ里

去来見伊勢　いさめの店
丹後夕陽　中みの里
奥州妻取　津国よみの店に人まどろありやあらんわが雨うけ 諸

他蔵未勤　人ばきの里
大和十市　と織ちれさと

頼里信州　あめのめれ里
伏見山城　かとろさと

と雨りやならんいづ里もおりし

●草を

菖蒲　はうぬ　将　らも　癸　あかむいとおもし。家の袖代よおして。さ府が　さやき　梓頭

しとなわくんいろじまめでぬし。のさ雨をいとおし　諸道具二ツ乃府癸のままや

葵祭の家よ人くあおひかづら紋無府や。賀茂杉尾は社司。

前日よおふる段へ東西へ立府。四月中の酉乃日やこのあおきいは

二茎草まろ草草とも

澤瀉 おもだかもまた名のおもしろさやこころあるべし一名とも

面高草ゆゑ名心あるべし名とおもふべしとも

曲禮曰凡視上於面則敖 呂氏註知其不能下人

みくり 蛇床子 ながしろ

みくり 蒲草 三稜草 実九利とも云ふ。和名類聚本草註引

三稜草 本草に八荊三稜甚沢蒲草と訓じ云ふ。その下に圖經

説引て水香稜と一名よわげる。水香稜説も荊三稜を

合て蒲草説みくりとよむべきなり。みくりは蒲草三稜

一名を定め。本草和名の二説は三稜蒲草とあらべてあれば

是非ともに一名とは云へぬ。このほか海蓮草。みくりとも云ふ

そのほか水栗草と一名にも。

ながしろ 本草蛇床子や俗よいふやぶこうとよむ物や。

りんは 継子草の字をながしろと訓じ云

こけ 苔

ちぐふ 苔冊 苔面のあ紙草

ちぐふ苔は生面ぐりてまろきものや。羅の類や源氏宿

木の巻にちぐふ引とこそ。この海は木蛸苔のたぐや

ちぐあれば。ちくあるとちめるハ。苔冊と古面をこぐふ

同苔のこと。苔冊の栄雅卿そのさとり。又の説苔膳

ぬんだりの一名とも云ふ是もいふ説なり

さげみ（酸）わやのもんり（紅）てあるも。ちとものよわいぶり。

和名は本草を引て酢漿の字をさげみとちがへたいか

本草ふまず。酸模（シヤモ）の字なり。酸母草とも。三葉酸とも。

せまいか山大黄やうぞ。俗はふすいの草と名付たものや。

あふぬま草（うちむしし）。きりのひさいはあるもむしもぎふ名のもりうず草や

岸の額（ヒタ）は生ほかあやうさ草のふや必あやぬ草の実をあ

つめるは知らぬ。観身（ヤヤシ）岸額（ヒタ）離根（ネ）草と本草乃題まて

羅維（ライ）の作也。生壁草や

いつぬで草。生壁草（壁のくも）といふ。ほうあくわいはや。きりのひさちもこれを

くづまやすげなる。白灰（白灰のくも）のいしどうふいえおひずやわんとふ

ぞわろさ。無事あるあり草をおもふあるさりやあるむとおもふ

もおりまるあきるもとうしあるりやといづまをおりし（もの忘れ紙つゝそ簑笠りはゆ居ワイヤ）

垣衣（壁のくも）ものふまいるありけや。屋（家）のつぬ（ヒ行湯）ものふちものはぬあどりわるぢ

りあひ生るさぬいるおり

大和物語はものふまわすれ草回しやあぢーわりとあるは

わすれや。ものふはりそるぢまて。ほーのやうるものあるや

意ーさといて本屋ものふまるとあるとほよるる

又貴人ふまにもの忘をうさてみすまるりわるも市ぐるや是

を忘のふまの乃一名。あるものーまといふまつさて用ゆ。ものの忘（忘れ草）

怪拙（怪拙）

ものもあるもあるとるふ我名はあるもふまるもやあるむ

君臣さてうの事やのひけまハあるものの事をあひそ
うけを考へぐ事ぐ事あるの事をうけひもの一事や。
事の事の名なり。この事をつくさ事もまさあひやとふ
心や。言ふ見べくばば

蓮

うもぎいとおり　つぐふもおり　渋茅　よつのもの
荊三稜　萍又蘋　葵　よつのもの
まろこすげ　うきくさ　あさづ　青鼈草　木賊　あぜはぐら　とくさをいふを。
とくさの上よわ所凡の者ハ少と事もも
風よあるくんなもそいるあんと。おもひやるて
菰　猶柴　麗ゆくと所躰也
ゐづふ　ゐづーバいとおり　こすのうさ葉ひらうあげるく
逢
のぐふすあるひのおもてり。ゆかさ事とちつくとひつごり
課　ものあるのぐとおりあるも
あぐまいてあるくいとおり。どちあげてものをつけあぐてみる

ちふいとうおり。あひ蓮花のつくもの。ひはけよ事ある。実ハずる
受　念珠
つくあさ。念仏して法を修ふのひとすれば

玄義云妙者妙名不思議法者十界十如推實之法也

釋云十界諸法本来本妙法甚深微妙之法也

蓮花を兼ていふのあひひしくや

生於泥中不染於泥妙法在衆情中不染衆泥全如蓮花

是其譬喩也

花ハ佛ふ事わ

方便品云乃至以一花供養於盈像漸見無数仏

三ノ廿七

蓼蓼おとも行よりて所みしと

蓼蓋法師迫も貪着蓼擁和歌

あはれ。蓼蓼と云句一蓼と蓋と共に所

山菅
やますげ　山蘭
やまゆり

やますげ童蒙抄に麥門冬とも書けりと云

山ゆりの花の名也

濱木綿
はまゆふ

羅日蔭
ひかげ

ひかげも蓼の類。古事記に多土能を引く。

羅の字ひかげと訓じる。也茎の名也。又はまゆふ

於茎
みくきのうちはの如百重なることはおりてあるあらぬも

人名

この人の紀行也。もろかよ志ん氏と云。大名の大饗のはし。

志ん氏に献ずる句意也。是をもて雉の足をつむや格の

又はまゆふ芭蕉は沖所蓼の名のうすくおりくるる格

也。又伊勢の国と云所あり。どれもそれ紀行あるべ

葦
あし　葛
くずの風はやさしくまれくぶ　のいとうくみゆるおり

●蓼の花
唐
あをしこ。こうそ花はうや。やはらもめでる　愛

杜甫が詩に。麝香眠石竹。鸚鵡啄金桃と作る也。

うるはしきるるる所はさとうぶ。あづまにおるる石竹。

曜麥　李蓼は日也本草を引て。一名石竹とある

女郎花 女倍芝

なみのへし　指捷　さまやう　菊花　苞　苞　苞

ちゝのあぐるかぐ

信濃の国射山(ミさ)の七月廿七日芦(あし)の穂(ほ)まで都をなる。あのも

乃(の)そぐとゝぶ。

番(つがひ)鳥(とり)

もゝしもすゝきはたをゝるびとのはゝまでおゝうゝたあるめれ

おもゝ。

この歌乃(の)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ

按擬

紀名おもてにしるし頭のくさもくさのつれなきさま

唐葵　考

くさあひにそどろわきてみくさのぜ日向葵とふものるるのうずまふさぐひてぞくさんで

をごての葵木のこころとも おぐでおくさ

説文黄葵常傾葉向日不令照其根

韓忠獻詩　炎々天花尽歌錦繡独成林不入當時眼其如向心

ものをそこくさねどにしるしぬ　岩ぼくじをもあるまか

くねどぞおくもてぞみるもとらあるこのすぐふおく

この方法おもふ考　按拾遺和泉式部

○岩ぼくしおくもてをみるぜくさ　おくあれ多ゆふれ

蕃蔵　人家

にしるびそどにくさて校のさあおどそむつくるどおく。あ紀くあぜ

花の枝ふれつくるあれつくるおのぼーみどのつくふうぐれさくさ陪ゆふ

映ぐ

本草蕃薇夏草早花開者也

白氏文集十七　甕頭竹葉經春熟階下蕃薇入夏開

●集を

古万葉集　古今　按擬

拾芥抄云万葉集廿巻四千三百十五首　長歌二百五十三首也

部立錯乱不定　古今真字序　平城天皇詔侍臣令撰万

葉集　按考このあれ帝説多。　言葉律呂　平城之号

者比叡聖武　桓武大同之朝号平城帝見国史

撰者　称山上憶良或称橘大臣或称茨原真橋或称大伴家持

聖考時代、聖武天皇 撰者、橘諸兄左大臣大伴家持と説
定すべし
紀已云 古万葉集とて四巻あり。非代ちがう人々の歌。源氏
天皇の撰也。源氏もめぐらせの巻まも。源氏帝の名万葉集
とあるとなり。もとは一万葉一部廿巻。東城天皇に献じ奉り撰
又万葉抄五巻。男し撰ぶ。一説に一つの五人抄ぶ同廿巻抄ふ
知撰者この外諸源のてを此撰四巻。月隠集に但うるはさ
撰定の抄ぶてはなくして。ただ本ばかりなる所なり。
撰ぶもつ云いまし乃万葉とは後の一撰合点 細源 さぐて全
のを本ばかりめる。家物えらひて。さまの所やかの人を詠ぶ非ず

永雨説。古さ集ならばたの字を付ける
古今 真字序云 記大内記紀及則源平記書くこと無相
同氏河内朝恒右馬府生壬生忠岑小野獣家集并古集
家歌日録万葉集抜萃童有部新撰奉こと勅為二十
巻名曰古今和歌集 男し集 也紀のの時やまとうた
也原人をもひ一いまの歌をもらしめ行いて形為後のひん
ぐ原ふて高らまもあり。 於琴 古と集廿巻千首を
後撰 中納云入道抄云 於昭陽舎後撰之時 紀ト宣旨云
源憲公。昔人抄奉り云 天暦五年辛亥十月和利出重山院
人抄伊尹為和歌所別当 和歌所根本是也 坂上望城源信紀

時又大中臣能宣　清原元輔ハ撰之　後賢無世見
拾芥云　後撰集世尋子二百廿七　末子二百五十六
栄花物語ハ　ひゝ言　後世帝の時代　天平勝宝五年ヨリ
左大臣諸兄ハ諸ハ大臣集　万葉集　ヒトマロ集
四代の先帝の時　古今世尋　えあとの
めでたうせはせのふこの時　その古今ハいまぬ
ひゝのもいまのも撰せのひてのちハ撰ばとて　後撰集
いふんをつけさせのひてぞ　まこ世尋ぜんじのひてぞ
●歌の題を　万葉　古今　後撰のちよみこき題をもちゐる
都　みやこ　菖蒲草　みくま　沼　ぬま　蓮　はす　蓮　ひるげ
菊　きく　菅草　すげ　青鞠草　あやめぐさ　梨　なし
撫子　なでしこ　浅茅　あさぢ　宋　そう　撫高瀬ハ　鶯　うぐひす
槿　あさがほ　朝顔ハ　あさがほ
●おもかげ　せうとくのこと　心おもかげ
十二月の山ごとのはしめあや
山門ふ三年十二月の山ごとにて楼足するもの
紅葉てもあひこのべくしかあハ山ハ　ようざん　のちこころ
あくたふ
ちくあるやみあるうつくしこの　あまりけぶくとてあくこと
さてくさすくるあみのくこの　あくハはまるであるとて　ぞくとくこと
大ふくふくふくものこ　ふくみのくこの　いまのこのころ従者のるもの
ふんあくふきものくこてぞ　人ものくるまをくくこの。

三歳のちご　ものいはぬちごのうちづくりて人のいでくるわざをあるにも
出いでくるこころづくりてばかりあること　人のかたちしぬものかな
くちきくよいちごのうちに　まうけぬ心ばえのこころと

・あどけなきもの　まうけぬ心ばえのこころと

なつやせぬ　なつやせぬ。　あるにもあらぬ。　やつれたる。
おいたる。　人のわたしてはたらぐつて。　ちりぢりしたる。
おもてをふくむと。　あめくきたると　あかぢ
あめと　きりぐちや。　人ぶりをもちうせめるを　ふるあるにんぞおぼゆる。
とさ　ぶ　おりたるにもあるものねて　若中ばたらいねさいりて
おちぶれ　本づてひてねとびれ　一色ともてあそび　復声ともて
もたるのみあるりはあるひておりしまき　人をあのひてあひたるを
とびたるおりてそ

なつこそおりたれいみじうたどりたる　戸障子
寝ねずなるぬやどてよりつの示うかあけがたうあれどすぐしうた
わたされるおいぬすこいはべきるあれどりみるいとどもするわたり
あるあるるまへよりたのあるく　若あるけの姫　居
こころしておりたれ。　をのいたるいたりうさもしさよどもあ人とうづもるく
ものてきくようのるれ　雪あるる色のたつこと　ものくそるるやうる因ゆるるおり
たるのこるはばあはるのうちよりをこめあるうるあけどいたりうの
ゆくとあるさがつくるるるる　仕事をあるること　中
懸想　わたるるるるるて　詩判ばくるあ　きあるるるる
あるたるる人よてきるるるパりあべるるるるかるるるひまるるる
異者のるるるるるるるるるるる　公義　あるて
あるねどものづるるるるるる人のすけるるてあるる人くるるて

霊異記云 手賀石室山見数童子囲碁與質一物乎棗核
人含之不飢留詩終斧柯爛尽已帰無復時人

煩悩
若悩

立部
透垣

●ありがてさもの

香
姻
姫
従者
銀
孤
本性
宝

[illegible]

顔氏家訓云 借人典籍皆須愛護 先有缺壞就為
補治是亦士大夫百行之一也
滑陽江禄讀書未竟 魚有急速必待冬末整齊而
返得起故無損敗人不厭求假或有狼藉几案分散部
秩多為童幼婢妾所點汚風雨蟲鼠所毀傷為累德
吾每讀聖人書未嘗不肅敬對之其故紙有五經詞
義及聖賢姓名不敢他用也

おのともかをはしーもちぐわ[illegible]人のすゑ[illegible]
中ようさる。 つひようさずんば [illegible]

あをみてををぐ[illegible]

皆練を。おもてうつおれうちはかねはそのをいうおう
束也。 搔練とも云也 緋[illegible]
内宿 廊
うちはかねはそのをいうおう みのこどもみあけうぐ[illegible]
いみどうあを入てをつをいるすし ふ袍を富あるをどの風
ぐをしてへ[illegible]をいるおう[illegible]ぐわうぐ[illegible]の乃ぐわうぐ[illegible]
ぐはぐ[illegible]てみせ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]のいみどう[illegible]わ[illegible]
[illegible]
あをぶよやうく[illegible]乃[illegible]陣[illegible]
上小部
清少

くとをいつさて行よ。右上人あまさこゝろ（廿房の）
ずて。夢をさまさぬ。ゆゑ入てものぐるふ

朗詠 夏日閑避暑 源英明 池沼多蓮 秋来風

右上人のおもかげこゝろの月みるまゝにそよろもあるとぬのぐるぬのあるこゝろ
月見行くるゆゑめてこゝろ月こゝろのわいよるもひとも右上人のこゆゑ私
あり。くんぐらめゆゑてこゝろのあり。おゞろけよいそぐこゝろのあさ。ゆゑ
（上達部退出し禁中をまもること）
すこゝろ。わぞこゝろ。ゆゑこゝろ人のゆゑこゝろてう所
さげこゝろ。こゝろもいられ。むつこゝろもわぞ。いぞこゝろ
（言種）
とふこゝろをて出て。ゆゑ行こゝろ。ゆゑこゝろ。まこゝろ。ゆゑんといふ。
（養子あるゆゑ愛子をもつくゆゑ）
こゝろのくるこゝろさげゝる ふぐくこゝろ。ゆゑ人をこゝろのびく

むこゝろ。ゆゑ。ゆゑこゝろ。ゆゑ。ゆゑこゝろ人
（むすめのおやの心也）
いこゝろ。ゆゑこゝろ。ゆゑこゝろ。ゆゑ

精魅を追ふすけをと造物をして空の上りいたるの中にた生
きたるこの命の沈伯て和杖をありむ。とて生事をあるべ
き。面よりてくるをぶべし

神示のめんちやう

人長を神示の前人陪従をの長や内侍所の出神示をりハ。韓神
甚駒をの時起て前をのや。　行ゝの根源を番一

禁秘抄云自二院御時。十二月有出神示。多陽年以之迎代
毎年をり
江次第云次御拝南庭出拝。如宮司網代次上迎出円坐
次将以下敷按内侍退下殿上人各在本座。前置三献

頭以下相分勤之。殿人所雑色取龍子次人長起處事。先問官。
次名簿面次人〻を起。人長起百戈男。殿人一〻進奉仕畢。
人長退次左弁八利次弱食地下。倍従次次甚弱人長起前是
同人長給膳掃

次のくらちすめむらさめふわひ〻ゝ。　出雲やう出のるの和さ
祇園は出霊舎ゝ月十四日や。ゝ事根源ゝ。この家は日八稜平八
ゝるゝるゝ。ゝ長をゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ出ゝ出ゝ。
祇園の社八貞観十一年ゝり祇園宮乃ゝのて。山城のゝゝ
をゝゝゝ。ゝ盛爲ゝのわゝゝべゝて牛頭天王ゝゝ武塔天神ゝ
ゝゝ下界。ゝ融院天禄元年出吳舎初ゝゝ

振幡

法華経の五乃時をとき給ふ経つけ。西方の人を制し給ふ。
法霊舎の五乃時をとき給ふ経つけ。西方の人を制し給ふ。
ゆゑ榜を常事よりなりけり。西さこの五
乃時をとき給ふ五十年ばかり事ノ有し仏所や。古老の町
人をおもひ給ふとぞ

清少納言旁註巻第四